



進修同窓会 HP にアクセス

第177号

2024 (令和6) 年4月23日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
HP <http://www.sin-syu.jp/>

霞ヶ浦遠漕……1909 [明治42] 年の鹿島遠漕 3

土浦から鹿島まで、霞ヶ浦を元気に横断した土中クルーでしたが、陸の上では大舟津の頑固爺に悩まされ、鹿島の小学校では蚊に喰われ、と散々な目に遭ってしまいました。今号では、遠漕2～4日目(8月10～12日)を5年橋本芳雄(中9回)の「鹿島遠漕記事」(1910 [明治43] 年1月発行『進修第13号』所収)と尾崎楠馬先生の日記とで辿っていきます。《 》内は尾崎先生の日記の記述で、引用文中の【 】内は筆者による注記です。旧字体は新字体に改めました。

なお、遠漕の航路図を進修同窓会HPの『月刊Acanthus』第177号3頁に掲載しています。

「鹿島遠漕記事」 橋本芳雄

十日(第二日)

《昨夜は僅かに二時間眠りしのみ不快至極朝食後鹿島神社に詣で……》

今日は一日逗留【とうりゅう】して、鹿島灘に海水浴を試むべき予定になつて居る。三々五々神社に詣でた、まづ鬱蒼たる老樹と神寂び【かみさび】たる宮居とが、如何にも神々し【こうこうし】さを感じせしめ、自然と崇拜の心が湧いて来る。鹿や【日清・日露戦争】戦利品などを見、社殿に額い【ぬかずい】た。森の間を出て、これからいよいよ高天ヶ原【たかまがはら】鹿島の神が降臨したとされる地【へ行くのだ。一同は遅いので、野口君と急いで行く。僕は以前高天ヶ原へは行かなかつたので、野口君に案内を頼んだわけだ。草は道を掩ひ露を宿して居る、所々に野撫子【のなでしこ】や桔梗が咲いて居る。道を左に取つて進むと、遠く鶯の声を聞く。春の終りは此処にあるかと懐しく感じた。

おや変だぞ、こんな所では無かつたと野口君が疑ひ初め【始め】たので、僕も知らぬ乍ら【ながら】不安心でならぬ。里人に聞いて見ると、前の道を真直に行けばよかつたのだと云ふ。取返しがつかぬ。急いで事を仕損じたのだ、拔懸けの功名美【しん】事失敗に終つた。よ【よ】良・善・能【よ】の約。(下に打消や反語を伴つて不可能を表す。とても……できない) 高天ヶ原へは出ずに海岸へ出て一同に会つた。君等は何処をまごついて居つたかと一本突き込まれたので、後学の為地理を搜つて来たのだと負け意地を張り、其上君等は鶯の声は聞くまいと威張つてやつた。

空は曇つて居つて冷かな【ひややかな】風がソヨクと吹く、手を入れると水は頗【すこぶる】冷い。加之【おまけ】に大きい波が白泡を立てゝ来るので一同勇気が失せた。尾崎先生は先頭第一に跳込んだ、そこで我等もやつと着物を脱いだ、

脱ぐは脱いたが怖ろしくて入れぬ、僅に【わずかに】岸で体を浸すだけだ。(注1) 先生が入れと云ふのでやつと勇氣を出して入つた、そら浪が来た、教へられた通り体を斜にする、小さかつたので無事たつた、しめたと思うて居ると、次の大波に脆く【もろく】も顛倒【てんとう】さ【れて了つた。怖気【おじけ】はつくし、寒くはあるしで体は震ふ、再び入る勇氣はない。雨でも降つて来て帰ればよいと思うたが、やがて晴れると云うた先生の天気予報は外れつこなしだから仕方がない。

見ると、六七歳位の小児が多勢、切りに【しきりに】波をきつて居る、或者は板子を持つて遠く沖の方へ出て行く。あんな者さへ出来るのに五尺【一尺は約30cm】の男子出来ぬとは恥辱だ、日が出て暖に【あたかに】なつたので再び入つた。今度は波を潜つた。すると忽ち背負投げを喰はされて、其上手拭は取られる耳へは水が入り随分酷い目に会つた。此は豈僕耳【あにぼくのみ】ならんやだ。一同不平【ごぼ】して居る。その中ざぶり大きな浪がやつて来て、僕等の着物を襲つた。大狼狽【おおおたて】で【おおあてで】走つて行つても間に合はぬ。帯から着物から帽子迄皆ジタジタ。是では帰れぬと覺悟をきめ、着物は舟陰へ干して再【ふたたび】入つた。今度はうまく行つた。一度毎に勇氣が出、面白くなる、それでも或時は波の為にくるく廻されて、吾一生も此で終りかとまで思つた。やつと上つて見ると、肩からは血がだらだら裸には砂が一ぱい。その中に日は益々照つて、暖くなつたので、愉快にやれる様になつた。白帆【白波の誤植か】を一つ越して先へ出ると楽で面白い、波がフワリくと体を持上げたり下したりして実に愉快だ、帰りに波に送られてすうつと上る。上つて砂に体を埋めて暖める。これを幾度も繰返し【しきりと】何か漁つ【いさつ】て居る舟二三隻有る、沖には白帆が沢山走つて

居る、遠い漁村は褐色にかすんで、陽炎【かげろう】がゆらゆらと立つて居る。魚が現はれたとて、近くの舟が一隻出た。やがて舟陰で弁当を開き、水を飲み、近くの家に行く。砂は焼けて足が非常に痛い、途中に美しい海岸植物が生えて居た。大分疲れたので三時頃帰途に就いた。

《更に鹿島の海浜に出て荒き波冷たき潮水に浴し且つ熱砂の上に横はり且つ乾し且つ浴し半日を愉快に送る蓋し【けだし】近來の快事なり此間船の影にて眠ること前後一時間ばかり……》

高天ヶ原を過ぐ、一面の砂原で小さな浜松が生えて居る、虫が連りに鳴く、まあつまらぬ所であつた。是から鹿島までは小松の原で、焼くが如き日光を浴びながら喘ぎ急いだ。やがて鬱蒼たる杉森に入り、坂を下つて御手洗【みたらし】に着いた。水は清くて鏡の如く、一幹の老椎が、彼方の岸から突出して池を二分して居る。千古の緑を湛へた老杉は、その周辺を囲んで些【いささか】の日光をも漏らさぬ。水を掬つ【すくつ】て飲むと、冷氣満身に浸み渡る。

僕は先生に従つて衣服を脱ぎ、ザブと許り【ばかり】躍り入つた。実に身震ひする程冷い。やつと勇を鼓して向岸に遊びつた。水は少しも濁らぬ。

《帰途御手洗の池に浴す清冽【せいれつ】骨をさす概あり……》

急いで上つて帰つた。夜は、今日の自慢話や失敗談に大分花が咲いた、明日は愈【いよいよ】出発だから、休養が大切と早く寝た、蚊軍蚤軍の来襲は例の如しだ。

《夕食後雑談して九時前入床今宵は机の上に蚊帳を吊り安眠を得たり 時々寝む【さむ】》

(注1) 僅に【わずかに】岸で体を浸すだけだ。
霞ヶ浦でしか泳いだことのない土中生たちは、初体験の海の波に腰が引けたようである。



麻生警察署旧庁舎 (1904 [明治37] 年竣工)
設計は本校旧本館と同じく駒杵謹治

注2) 御手洗【みたらし】

御手洗池。1日に40万リットル以上の湧水があり、水底が一面見渡せるほど澄みわたった池。昔は、参拝する前にここで褌みそぎをした。現在では、年始に200人もの人々が大褌禊を行っている。

十一日(第三日)

眼を醒ますと、空は曇り、風は強い。是では帰れるか如何かと危み【あやぶみ】初めたが、行かれる所迄行けと、鹿島を辞して大舟津にきた。例の「銚田君」相変らず渋い顔をして御座る。午前七時半準備整つて愈出発した。波は実に高い、沫【しぶき】が顔にかゝる、こんな狭い所でさへかうだ、まして三叉沖は嘸【さぞ】酷いだらうと、早怖気がついた。此処を横切ると幸に風を利用し得られるので、予て【かねて】用意の幕を棹の先へ付け、早速帆を拵へ【こしらへ】た、中々旨く行かぬ、とうとう「桜」は帆を断念して漕いで行つた。僕等は図々しく潮来まで帆で通した、それでずつと遅れた、が大いに労力の経済を実行した。潮来からは、風と反対なので、一生懸命に漕いだ、牛堀で「桜」に追付き少し休んだ。

《六時朝食を終へ出発七時過大船津を出て大風を帆にあてゝ北浦を横きり潮来に向ひ更に牛堀に至る たゞ見る霞湖荒れに荒れて……》

女達が「この浪にまゐ」と又驚く。中に一人が、「お前等命が惜しくないなら行くが好からう、今高瀬【船】が波に答【苦】(とま 茅で編み 家や船の上に被せて風雨を防ぐ覆いの誤植か)を越されて来たさうだ」と云ふ。今度は此方が驚く。が此地は万事都合が悪いので、兎に角麻生迄行く事にした。出て見ると実に波は高い。舵を余程旨く取らぬとすぐ流されて了ふ。「桜」の底部が見える。一生懸命に漕いだ。実に此時の恐怖と、努力とは一通りではなかつた。やがて麻生に着いた。行かうか行くまいかと議論二手に分れた。兎に角

少し待つて見やうと町見物に出かけた。公園を見て帰る頃に、雨がポツ／＼やつて来た。其上警察署へは暴風警報が来たと云ふので、愈此地滞在と決した。

《白波の波に翻る【ひるがえる】を一行大いにはばみ遂に麻生に向ひ一泊と仮定す。》

【夏休みで帰省中であつた】郡司君の尽力で、柏屋と云ふ宿屋へ宿つた。すぐに警察より電話で土浦に報じて貰ひ、又尾崎先生は校長に電報を發した。校長返電して曰く。

イソグナ ジチヨウセヨ

と。言簡にして意深重。是より自重の語大いに流行る。雨が降るので外出もならず、碁や将棋を戦はした。

《宿を柏屋に求め電話、電信などをりをり知らせをなす》

夜、郡司の父及卒業生斎藤両氏訪問せられ、種々尋ねてくれた上、何れも菓子を寄贈して呉れた。

小学校の先生達が、講習の為大分居るので、遠慮はしたが、それでも菓子を喰ひ乍ら、随分歌つたり、饒舌つ【しゃべつ】たりした。尾崎先生が、「衣なくて……」の語【うたい】(注3)を呻つ【うたつ】た。頗体の大きな下女が居つた、吾等は第二(セコンド)徳島屋(注4)と命名したが、それで唄は中々上手、何処からあんな体にも似合はぬ細い美しい声が出るかと思つた。

十一時一同就床。今夜は蚊に喰はれずゆつくり寝た。

《夜は卒業生斎藤某来訪菓子を馳走せられ郡司氏の父に丁重の菓子を送らる加ふる宿屋の待遇よし一行皆喜ぶ十時過快く入床宿婢貞といふもの肥満の大女声音の美妙玉を転するが如し》

(注3)「衣なくて……」の語【うたい】

謡(謡曲)とは、能の音楽(言葉・台詞)に当たる部分。また、そのみを謡うことを言う。

「衣なくて……」は、三保の松原を舞台とした、天の羽衣伝説を扱った謡曲「羽衣」(世阿弥作)の一節。

注4) 第二(セコンド)徳島屋

徳島屋とは、川口にあった艇庫の敷地を借りていた真鍋の徳島屋と思われる。その店員に大柄な女性がいるため、柏屋の女性を第二徳島屋と命名したものと推測される。

十二日(第四日)

一同の財布を叩いて宿賃を払つた。今日幸に雨も降らず風も無い。喜び勇んで麻生を出た。郡司君より一同に弁当を贈られた、実に感謝に堪へぬ。

《午前五時頃眼さむやゝ不快なり。朝食を終へ準備して出て来る。郡司氏又弁当を贈られ且つ波止場に見送らる好意謝するに語なし、七時前五分船出し平滑の湖を航して……》

天王崎の松も幽かに【かすかに】なり、浮島もやがて越して、大山鼻も無事廻つた。いと静かである。これより前、須田が腹痛を起した。「赤」は少しも同情無しに早く来い来いと怒鳴る、乃で【そこで】我等はやけて了つて、一生懸命に漕いで赤をずつと抜いて了ひ、お出で／＼をしてやつた。が喧嘩をしても仕方が無いと妥協茲に成立し、赤を先へやつた。沖宿で一寸休み、渴を医し【いやし】汗を拭いた。

間もなく田村の弁天へ着いた。此処へ来ると早家へ帰つたも同然。一旦水へ入つて泳ぎ、上つて昼飯を食つた。短艇を掃除して後木陰に茶話会を開いた。席上尾崎先生俗謡を真似て歌つて曰く。
シヤブ／＼と漕ぎ来るは、土浦中学水上部の遠漕隊、色は真黒氣で歯が白い、オールを握つてバツクをきかす、大舟津の頑固爺、鹿島の学校で蚊に喰はれ、麻生の柏屋で自重して菓子を喰ふ。オールに合せて一同で此歌を歌ひながら、午后四時無事川口着、水上部万



田村弁天の森 写真左・森のすぐ前が湖畔

歳を三唱して解散した。金は要らず、自由で、而も面白く、且勇氣を増し、意志の鍛錬になつた此行も、無事これで終りを結んだ。

《十一時半田村弁天社前に着き昼食后二艘の大掃除をなし、終りて茶話会を開き四時過艇庫に納め万歳を三呼して解散、四時半帰舎すれば多くの書状到着し居れり 一々閲読、夜は校長を訪問して委細を報告し……》

この遠漕では、鏡の如き湖面を漕破し、赤青のユニフォームで牛堀の町を闊歩、大船津の頑固爺や蚊軍蚤軍に辟易し、鹿島灘の大波に弄ばれ、霞ヶ浦の荒波と格闘、柏屋の美女の美声に聞き惚れ、尾崎先生の替え歌を高唱して帰港しました。湖上に若さを発散させる生徒たちとそれを見守る尾崎先生、両者の姿が鮮やかに伝わってきます。橋本が書いてるように、「金は要らず、自由で、而も面白く、且勇氣を増し、意志の鍛錬になつた」ボートは、霞ヶ浦を眼前に控えた土浦中学生ならではの、のスポーツとなっていました。

アカンサス第175・176・177号「鹿島遠漕航路図」→→→(本文中に登場する地)

